中央大学経済研究所年報　第53号(Ⅱ)(2021) pp. 289-303

現代企業制度研究会

戦後八王子織物産業の生き残り戦略に関する一考察

――工業団地計画・産業クラスター・地域産業システムの視座を中心に――

王　　玲　玲

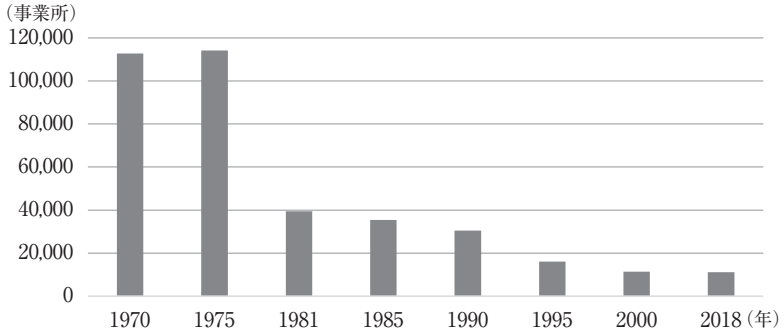
日本の織物産業は衰退してきた。しかし，その中で生き延びている産地もある。現在，八王子地域では数軒の機屋がネクタイ地や服地，マフラー，ストールの生産をしている。また，伝統工芸士が「多摩織」を織り続けている。八王子産地は規模が縮小しつつあるものの，残存している。なぜ八王子の織物産業は生き残ることができたか。本稿では，工業団地の経済的利益，産業クラスターの経済的優位性，地域産業システムという３つの視座に即して検討し，地域産業が産業専用の工業団地の開発を目指すことによって生き残ることができたのは産業クラスターを形成できたからであるという仮説を導く。産業専用の工業団地の構想実現を目指した八王子の織物産業のケースからその仮説の検証を試み，八王子の織物産業が生き残った理由を明らかにすることを研究目的とする。

1　はじめに

1980年代以降，日本の繊維産業が衰退している（図１参照）。同時に織物産業も衰退してきている。他方，この傾向の中で空間的視野を広げてみると生き延びている産地もある。その産地のひとつに八王子地域がある。この地域では数軒の機屋がネクタイ地や服地，マフラー，ストールの生産をしている。また伝統工芸士が「多摩織」を織り続けている。八王子産地は規模は縮小しつつあるものの残存している。産業集積や産業立地論の視座から，八王子の織物産業が生き残ってきている現象を考察し，その要因を解き明かす試みは興味深く学術的に有用であると思われる。

はじめに八王子における織物産業の歴史を簡単に振り返ってみよう。周知のように八王子市は桑都と呼ばれ，古くから養蚕や織物が盛んであった。織物産業は明治時代から八王子の主要産業として発展してきた。長い歴史の中で八王子産地は地域内に分業が進み，生産では機屋（織物製造業）をはじめ，染色，撚糸，整経，意匠，整理などの専門業者が集積し，流通では買継商に依存してきた。職人たちはさまざまな織物技術を取り入れ，改良しながらそ

図１　日本国内の繊維工業の事業所数推移



（注）従業者４人以上の事業所。
（出所）経済産業省工業統計調査より作成

の技術を蓄積してきた。江戸時代から消費地に近いことでトレンド情報を収集しやすいことから，職人たちはさまざまな製品開発を行い，時代をリードする製品を次々と世に送り出した。このような特性を持つ八王子産地は常に時代の需要の変化に応じて新製品を開発して発展してきた。その結果，八王子産地では多様な生産品目が生まれた。

しかし，第２次世界大戦中に織機の３分の２を供与させられ，多くの織物工場が軍需工場への転換または廃業を余儀なくされた。また，1945年８月２日の八王子大空襲で市街地が８割以上焼失した。このように市内に集中立地していた織物産業は壊滅的となった。

戦後の衣料不足で織物の需要が高まったことと織物業者の努力で，八王子は徐々に復興を遂げ，織物の町として復活した。この間，織物産業を取り巻く環境も変化していた。1955年と1959年に八王子市は周辺の村と町との合併が行われ，現在の市域ができた。1959年に首都圏整備法に基づき，八王子市は市街地開発区域に指定された。これにより1960年代から八王子市において市街地周辺部で工業団地の造成と工場誘致が始まり，各種の機械機器製造業，電気系製造業を中心とする企業が多数立地するようになった[1)]。

このような環境変化の中で，市内に立地している織物関連工場はフル操業ができなくなる。工場を拡大できるような用地がなく，騒音公害などの制約もあるからである。八王子繊維工業団地協同組合への聞き取り調査によると，昭和30～40年代には織物の需要があったため，機屋は24時間織りたい。しかし，公害（主に音の公害）が問題になったという[2)]。これらの状況を背景に1962年に一部の織物業者から公害防止を目的に集団化・共同化構想が出てきた。これが八王子繊維工業団地（以下繊維団地）の造成運動である。

1）　王（2020）を参照されたい。
2）　筆者の同組合への聞き取り調査による（2020年10月16日実施）。

戦後の八王子産地に関する研究は多数積み重ねられたてきた。吉田（1979）は戦後八王子織物の生産構造の変化と八王子の産業構造の変化を考察した。関（1985）は多角的な視点から八王子機業の構造的特質を論じた。立川ら（2001）は八王子織物産業の衰退研究の中で機屋の機能変容に焦点を当てた。これらの研究の中に八王子の生産基盤が空洞化した原因として山梨県への賃機生産に依存したことを指摘している。そこで本稿は，工業団地の経済的利益，産業クラスターの経済的優位性，地域産業システムという３つの視座から，地域産業が産業専用の工業団地の開発を目指すことによって生き残ることができたのは産業クラスターを形成できたからであるという仮説を導き，産業専用の工業団地の構想実現を目指した八王子の織物産業のケースからその仮説の検証を試み，八王子の織物産業が生き残った理由を明らかにすることを研究目的とする。

本稿の構成は以下のようである。第２節において先行研究を整理し，工業団地，産業クラスターと地域産業システムという３つの視座から分析する理由を述べる。第３節において上記の３つの視座から八王子の織物産業の生き残った要因を分析する。第４節は本稿の分析結果を整理し要約する。

2　生き残り戦略をめぐる視点

地域産業の形成と発展について，これまで工業団地，産業クラスター，地域産業システムなどの研究が進められてきた[3)]。ある地域に産業を集積しようとする場合，工業団地を造成することが１つの選択肢である。また，中小企業の集団化を実現する場として工業団地が造成される場合もある。ある産業が発展していく要因の１つはクラスター形成戦略である。産業が衰退しかかったときにどうすればよいのかを示唆するのは地域産業システムの研究である。

2-1　工業団地の経済的利益

工業団地が中小企業にもたらす種々の経済的利益に関して，百瀬（1978）は簡潔に示している。そこでかれの考察を援用して工業団地の持つ経済的便益を整理する。工業団地は計画的組織的に造成される。大企業からみれば，工業団地は中小企業の企業集団で，１つの機能的結合体である。工業団地の経済的利益は企業集団化による「規模の経済性」,「外部経済」と「サービスの供与」に分けられる。そして，日本の場合，工業団地を形成する目的は同業種の中小企業を集団化し，団地参加企業同志による共同化・協業化により，規模の経済性を追求しようとするものである。他方，中小の企業が工業団地に立地することによる利益は次のようである。すなわち，１）中小企業の機能的結合により，割安な用地を広大に入手でき

3）　工業団地は生産の規模と内容面で産業クラスターの小型版と関係づけられるであろう。

る。2）工場環境が優れた近代的な工業団地に参加して，企業イメージの向上と労働力の確保につなげる。3）共同仕入れと共同販売によりコストの低減が実現できる。4）共同化・協業化による専門化・分業化の進行により，生産性を向上させることができる。5）国および地方自治体から資金助成と関連指導が受けられる。以上のように，工業団地に立地する個々の企業はいくつかの経済的利益を得られるのである。このような経済は企業経済学および産業立地論においても分析が進められており，産業集積として分析されている[4)]。

2-2　産業クラスターの経済的優位性

生き残るための戦略的選択肢としてクラスター形成戦略が議論されてきた。その代表的な研究は周知のようにマイケル・ポーター（Michael E. Porter）である。

ポーター（2018）はダイヤモンドモデルを用いてクラスター形成を説明し，次の4つの要素の働きを説明する。すなわち，企業戦略競合関係，生産要素条件，需要条件，関連産業・支援産業である。そして，その説明の中で各種の経済的主体間の相互作用の重要性を指摘している。ポーターはクラスターを，特定分野における関連企業，専門性の高いサプライヤー，サービス提供者，関連産業の企業，関連機関（大学，規格団体，業界団体など）が競争しつつ同時に協力もしているような，地理的集中状態とした[5)]。

ポーター（2018）はクラスターを次のように論じる。クラスターとはある地理的な立地内で生じるネットワークの一形態であり，そこで企業や各種機関が接近することにより，ある種の共通性が確保され，また相互作用の頻度や影響力が増す。首尾よく機能しているクラスターは，単純な階層的なネットワークを超え，個人，企業，各種機関の間で重なり合う流動的な結びつきの格子となる。こうしたつながりは変動しつつ，関連産業にまで拡大され，強い絆および弱い絆の双方が発生する。クラスター内で関係性のパターンにわずかな変化が生じただけでも，生産性やイノベーションの方向という点で大きな結果が生じる場合もある。このような点において，業界団体はネットワークの形成を促すという面で重要な役割を担っている[6)]。

原田（2009）はクラスターが有する上記の関係性の重要性を捉え，次のように論じる。このクラスターが優位性を発揮するために，集積を支える社会構造・関係において緊密なネットワークが形成され，つまり，コミュニティが形成され，相乗効果が発揮される状態でなくてはならない。単に企業が地理的に集中した産業集積地（工業団地等）には集積のメリット

4）　集積経済に関する最初の体系的な分析はWeber（1909）により始められ，明快な説明が西岡（1976）によりなされている。

5）　ポーター（2018）『競争戦略論Ⅱ』73頁。

6）　ポーター（2018）『競争戦略論Ⅱ』113-114頁。

はほとんどない。また，かれは，集積経済は人間同士の付き合い，直接に顔を突き合わせたコミュニケーション，個人や団体のネットワークを通じた相互作用に依存している。そして，これが生産性の向上，イノベーション能力の強化および新規事業の形成に重要であるとの見解を示す。

Porter（2000）はこのようなクラスターが有する利点を企業間における企業の競争関係から捉え，その重要性を詳しく考察している。そこでも次の点が再度指摘されている。クラスターが有する競争上の優位の多くは，情報の自由な流れ，付加価値をもたらす交換や取引の発見，組織間で計画を調整し協力を進める意志，改善に対する強いモチベーションなどに左右される。こうした事業を支えるのは，関係性であり，ネットワークであり，共通の利害を有しているという意識である。その意味ではクラスターの社会構造は大切な意味を持っている。

2-3　地域産業システム

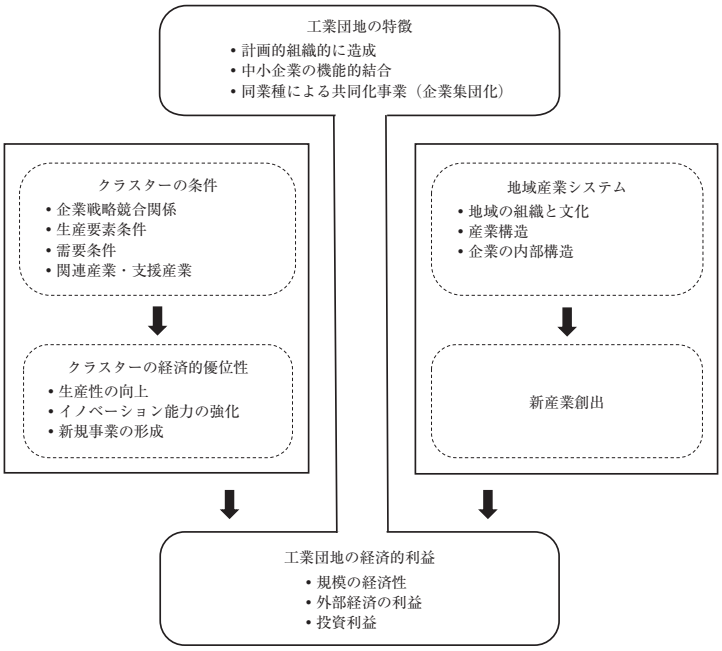
ポーターのクラスター分析を社会学的視点から進展させた研究者としてアナリー・サクセニアン（Annalee Saxenian）がいる。サクセニアン（1995）はシリコンバレーの地域ネットワーク型とルート128の独立企業型という２つの地域産業システムを分析し，クラスター形成の分析を発展させている。彼女は地域の組織と文化，産業構造，企業の内部構造という３つの側面から地域産業システムの分析を行う。その分析を原田（2009）の見解を援用しながら整理すれば以下のようになる。地域の組織とは，大学，産業団体，地方政府をはじめとする地域内でさまざまな社会的活動を行う諸団体である。これらの団体は地域社会を団結させ，共通の認識や慣習，つまり地域文化を創り出す。この地域組織と文化は相互作用し常に変化する。産業構造は社会的分業がどの程度行われているか，いわゆる企業間関係の在り方だが，これは他の２つの側面とも密接につながっている。企業の内部構造は企業組織内の中央集権と分権，責任の配分や専門家の程度，つまり柔軟性を指す。これらの３つの側面は密接に関連しており，変化への適応力はこれら３つの側面の関係の在り方に依っている。

サクセニアンにより指摘され，原田により再度示されている重要な認識は，地域の組織と文化，産業構造，企業の内部構造が相互関係にあり，私的な企業がいかに生産や販売活動を行うかなど，その企業活動の様相は地域の組織と文化など地域社会の在り方から影響され，また，企業活動の在り方が地域社会に影響を与えるということである。このような見解は工業団地の活動の在り方を分析する上で，重要な視座を与えていると考えられる。

2-4　３つの視点の統合の必要性

図２は工業団地，産業クラスターと地域産業システムの働きを示している。百瀬（1978）

図2　3つの視点



（出所）筆者作成

が論じるように工業団地は計画的かつ組織的に造成される。このように造成された工業団地は同一産業中の様々な中小企業の集団化を実現する１つの場として大きな役割を果たす。企業集団化により，工業団地に入居する企業がさまざまな利益を得ることができる。産業クラスターの場合は，企業や関連業者，各種機関が近くに立地することでネットワークが形成され，バリューチェーンがそろう。その結果，生産性の向上，イノベーション能力の強化，新規事業の形成をもたらし，産業クラスターの競争力が高まる。その結果としてクラスター内の企業が集積のメリットを享受できる。地域産業システムの場合は，地域の組織と文化，産業構造と企業の内部構造が互いに働くことにより新産業が創出され，企業および地域の競争力が高められ，地域産業が生き延びることができる。

このように，工業団地，産業クラスターと地域産業システムはそれぞれ形成過程が違うが，地域的産業集積により地域の産業が発展していく点においては共通している。つまり，ある地域に集積することにより地域内でネットワークが形成され，この密接な連携によりイノベーション能力が強化され，新事業が創出される。この新規事業の創出は地域産業が生き残っていくための源泉力である。地域産業が生き残るため，以上のようなことが求められることになる。

ここで，地域産業は産業専用の工業団地の開発を目指すことで産業クラスターとして生き延びたという仮説を提示する。次の節では産業専用の工業団地の構想実現を目指した八王子の織物産業のケースから検証を試みる。

3　八王子織物産業が生き残った要因

3-1　工業団地の計画と挫折

1960年代初めに八王子では織物産業専用の工業団地造成の構想が提唱された。その後，1970年に八王子市下恩方町に51,606平方メートルを有する八王子繊維工業団地（以下繊維団地）が造成された。

八王子繊維工業団地協同組合（1985）によれば，当初の計画は次のようなものであった。市内に立地している織物工場を用地拡大難と騒音公害などの制約から解放し，生産の合理化，新繊維織物の研究などを図るため，「現在の工場を一定の地区に集結し，整経，染色，撚糸，製紋など関係事業一切も適切なる作業場，あるいは必要な関係事業者等これに付随した団地」を造成するという構想であった。つまり，製織工場のほか染色工場，整理工場も建設し，各種原材料は共同仕入れをし，技術指導，検品，販売は団地組合で行う計画であった。また，工場用地のほか，団地組合員の住宅地，従業員住宅，共同住宅，厚生施設も建設する計画であった[7)]。

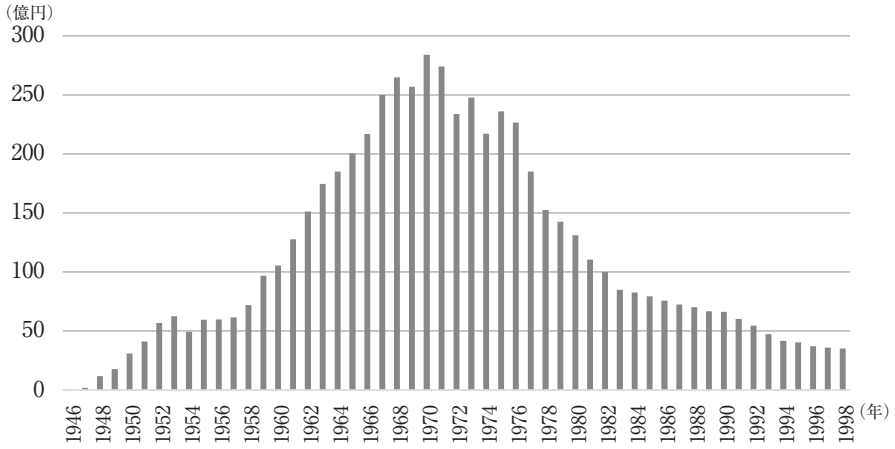
なぜこのような織物産業専用の工業団地を目指したのか。それは市内に立地している織物工場はフル操業できないからである。図３は八王子織物生産高の推移を示している。この図から確認できるように，繊維団地が提唱されたときは八王子の織物産業の発展期にあり，織物の需要があった。しかし，当時織物を製造する過程で出る騒音が公害となった。この騒音公害への対策として繊維団地の構想が生まれた。

繊維団地は八王子の織物業者によって計画的かつ組織的に造成された。1962年８月に繊維団地造成説明会が開催されたときは113社の参加申込があったが，最終的に繊維団地に参加したのは着尺とネクタイを中心とする織物業者20社のみであった。

なぜ多くの織物業者が繊維工業団地に工場を移転することを断念したのか。文献調査と聞き取り調査の結果をまとめると，その理由は，第１に資金面の問題である。八王子の織物業者は小規模企業が多い。繊維団地に投資する場合はリスクがかなり高い。将来への不安から新工場に投資するよりは現在の工場に設備投資をしたほうが合理的だと考えられること，第２に繊維団地敷地内に渇水問題が発生したため染色業者が参加できなかったこと，第３に団地に入るには審査があったこと，第４に製織の部分をアウトソーシング（賃機生産）に依存

7）　八王子繊維工業団地協同組合（1985）。

図3　八王子織物生産高推移



（出所）関（1985）160頁（1946～1965，1972年の値），東京都立繊維工業試験場（現：東京都立産業技術研究センター）『東京都の繊維工業』1966～1989各年度版，同『東京都の繊維産業：現状と課題』1990～1998各年度版より作成

する業者が増加したこと，第５に最新の織機を導入して騒音問題をクリアできたため，市内の工場を繊維団地に移転する必要がなくなったことなどが挙げられる[8)]。

八王子繊維工業団地協同組合への聞き取り調査では，繊維団地に市内にあった工場を移転する者もいれば，市内の工場を保持しながら繊維団地に工場を建設する者もいたとされる[9)]。市内にある工場と繊維団地にある工場の両方で生産を行った企業があったことから，当時生産が需要に追いつかなかったことが推測できる。

上記のように八王子は織物専用の工業団地を目指した。しかし，参加企業が少なく，共同施設の建設も見送りになり，計画通りに実現できなかった。そのため工業団地がもたらす規模の経済性や外部経済の利益も期待できなかった。しかし，繊維団地に入居した20社に関しては投資の経済性を享受できた。つまり，この20社は個人投資より割安で土地を入手できたのである。

原田（2009）は単に企業が地理的に集中した産業集積地（工業団地等）には集積のメリットはほとんどないという見解を示している。八王子繊維工業団地の造成運動はただ単に織物工場を同市郊外地に集中しようとしたものではなく，市内に集積している織物産業を繊維団地という「場」に移転し，再整備させようとしたのである。つまり，工業団地を造成するこ

8）　筆者の八王子繊維工業団地協同組合への聞き取り調査による（2020年10月16日実施）。
9）　同上。

とは目的ではなく，八王子の織物産業全体の競争力を向上するための戦略であった。産業専用の工業団地を開発することで産地内に織物の全工程をそろえることができる。したがって，産業が生き残ることができる。しかし，この繊維団地は織物産業クラスターのミニ版として機能しなかった。前述したように，繊維団地造成中に多くの織物業者が地域外へのアウトソーシングを選んだ。しかし，織物生産工程におけるコアの部分は八王子地域に残っていたため，量産部分を地域外にアウトソーシングしても，八王子の織物産業は生き残ることができた。加藤（2016）の研究によれば，1980年代八王子は東京に近いという地理的優位からサンプル品の生産基地になった[10)]。つまり，新製品開発の中心として生き残ったと考えられる。

3-2　産業クラスターの展開

八王子は先染絹織物の産地として発展してきた。絹織物の生産工程が複雑で，染屋，張屋，撚糸屋，意匠・紋紙屋，機屋，整理仕上屋などの業者がかかわっている。このように八王子の織物産業はさまざまな専門性の高い業種の集積と連携から成り立ってきた。織物製造のバリューチェーンがそろったことは八王子の強みである。この強みが新製品の開発や新規事業の創出を生んだ。女物への製品展開（大正時代），ネクタイ（大正時代末），多摩結城（大正末から昭和初）がその例である。

第２次世界大戦で八王子の織物産業は壊滅的な打撃を受けた。しかし，戦後，織物の需要があったことと織物業者の努力で八王子は織物の町として復活した。1949年の八王子織物産業の状況について，岸田（1960）は次のように述べている。織物工場の90％以上が織機台数20以下の小工場で，1949年６月現在，織物業640，撚糸業251，染色業81，張糸業73，整理業５，染色加工業（捺染）35，その他に若干の繰糸業，整経業，綜絖引込業があり，これらの組み合わせで機業が成立している。また，1950年３月１日時点では，広巾織機2,973台，小巾織機4,880台，合計7,853台の設備を有するに至った[11)]。

このように戦後八王子の織物産業が復興し，各専門業者の集積で織物のバリューチェーンが構築され，織物産業のクラスターが再形成された。表は戦後八王子で生産された主要製品をまとめたものである。これは八王子産地が製品開発に力を入れたことが示されている。また，図３から1950年より八王子の織物生産高が順調に伸びたことが分かる。1960年に100億円を超え，1965年に200億円を超え，そして，1970年はピークを迎え284億円に達した。ここで産業集積，つまりクラスターの形成が産業の発展に大きな役割を果たすことが確認できた。

その一方，ポーターはクラスター内で関係性のパターンにわずかな変化が生じただけでも，

10）　加藤（2016）104頁。
11）　岸田（1960）4-5頁。

表 戦後における八王子産地の主要な生産品

生産時期	製品名	特徴など
空襲後～1948年頃	真綿のチョッキ編	防寒具として被災者に販売。
1946年頃～1954年	加比丹銘仙	女物の着物。戦後初の八王子の主力製品。今までの銘仙より高級感やおしゃれ感があり，好評であった。
1950年頃～	多摩結城	大正末から昭和初に開発され，1950年頃から再び市場に出た。高級正絹織物として高い評価を得た。
1951年～	美多満御召	戦前服地として織られた人絹交織織物の「華紋織」を「美多満御召」と名づけて，1951年に再び市場に出したもの。和装コート地として需要が高かった。
1950年代初め～1974年	優美御召	1950年代初めに開発された。多摩結城を大衆的な求めやすい製品にするため糸使いを研究して誕生した。
1953年～1964年	みあさ上布	「夏物の着物」として開発された。強撚糸の面と麻を使って交織した織物。
1955年～	紋ウール	1955年に開発された八王子最大のヒット製品。毛織物で，経糸と緯糸の両方がウールの梳毛糸を使用。試作を重ね，従来のジャカードでも織れるようになり量産が可能。丸洗いができる着物地で裏も不必要。着尺のほか羽織用にも使用。
1958年～ 1970年代半ば	シルクウール	1958年頃に開発され1970年代半ばまで織られた。経糸を絹，緯糸をウールや人絹の御召糸で織る。
戦後～	ネクタイ	時代のニーズとシーズンごとに素材と柄を変化させる。着尺不況の中八王子産地を支える製品になった。
1951年～	マフラー	1951年に登場。その後，八王子の主力製品に成長。

（出所）八王子市郷土資料館（2020）『織物の八王子―戦後から現代までをたどる』より筆者作成

生産性やイノベーションの方向という点で大きな結果が生じる場合もあると指摘している。八王子の織物産業の場合，紋ウールが開発された後，好評のため多くの機屋が紋ウールを織り始めた。しかし，紋ウールの製織が今までの絹織物と異なるため，一部の関連業者が織物バリューチェーンから離れていくことになった。捺染業者の離脱がこの例である[12)]。捺染業者の衰退が紋ウールブーム後の絹織物の新製品開発に影響した。クラスター内での関係性の変化，つまりバリューチェーンの一部の衰退が新規事業の創出に影響を与えることが八王子のケースで確認できた。

3-3 地域産業システム――諸団体の連携・研究・コミュニケーションの展開

前述したようにサクセニアンは大学，産業団体，地方政府をはじめとする地域内でさまざまな社会的活動を行う諸団体が地域の組織として働き，地域社会を団結させ，地域文化を創

12） 関（1985）第3章が詳しい。

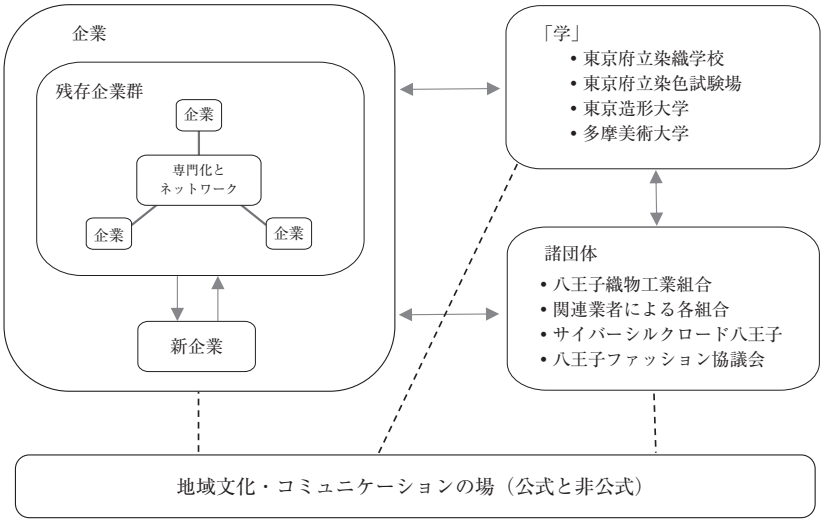
り出すと述べて，地域の組織と文化，産業構造，企業の内部構造という３つの側面から地域産業システムの分析を行った。この見解を八王子の事例において検討してみよう。八王子の織物産業の地域産業システムを図４に描いてみた。

八王子の織物産業はさまざまな専門性の高い業種の連携から成り立っている。また，各業種にはさまざまな産業団体があった。八王子織物工業組合への聞き取り調査によれば，繊維７団体があった。すなわち，織物工業組合，撚糸組合，染色組合，型染め組合，緯編協会，縦編組合，丸編組合と買継組合である。今残っているのは織物工業組合のみである[13)]。

八王子織物工業組合（以下織物組合）の前身は1899年に設立された八王子織物同業組合である。明治時代から産地を支えている。織物組合が設立されてからはさまざまな研究部会が誕生した。例えば大正時代では，八王子御召研究会，節糸織部会，絽織部会，袴地部会，八端織部会，帯地同盟部会，八王子織物柄の会という生産品種ごとの研究部会が相次いで誕生した。御召研究会は婦人服の研究を行った。２年間の期限で組織され十分な成果をあげられないまま1920年に解散となった。しかし，後に「多摩結城」（紋御召）の創製につながった。製品開発だけではなく，製品加工上の注意を促し製品の宣伝会を開催するなど織物の生産拡大と販路開拓に取り組んだ。

戦後，引き継がれた製造部会が再起し活動をした。また，新しい部会も発足した。ネクタイの製造業者を中心として雑貨織物研究会（1947年），多摩結城の伝統を引き継ぐ八王子織物

図４　八王子織物産業の地域産業システム



（出所）筆者作成

13）　筆者の同組合への聞き取り調査による（2020年９月７日実施）。

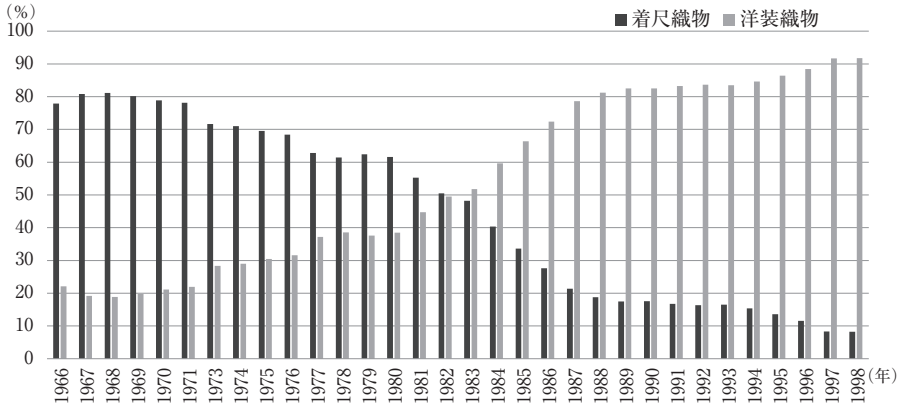
趣味の会（1951年），優美会（1951年），男物部会（1953年），マフラー部会（1955年）などの製造部会が組織され，多彩な製品が創製され製造された。また，1950年に織物組合が直営する共同整理工場が設立された。2014年３月まで営業した当工場は八王子市内の機屋だけではなく，全国からさまざまな織物の整理を受け入れた。

八王子ではコミュニティが形成されている。公式のコミュニケーションの場としては織物組合をはじめとする各組合とそれに属する部会・研究会である。非公式のコミュニケーションの場として，八王子には料亭文化がある。繊維団地造成構想を語った場所は八王子にある料亭であった。このような組織と文化を持つ八王子は時代のニーズに応じてさまざまな新製品を創出した。ネクタイとマフラーがその例である。

ネクタイの例を見ると，戦後，すぐにネクタイの生産を復活した。1959年に八王子のネクタイ地生産量は全国生産量の約70％を占めるようになった[14]。1970年代後半から着尺織物の需要が減少する一方であったが，ネクタイを中心とする洋装織物は多少の変動があるものの順調に伸びた。そして，1983年に着尺織物とネクタイを中心とする洋装織物の生産額が逆転した（図５参照）。このようにネクタイとマフラーは八王子産地の主力製品になった。着尺不況でネクタイ地やマフラーに転換する機屋も出てきた。八王子の織物産業は着尺不況になっても生き残ることができた。

クールビズなどの影響で近年ネクタイの需要が減る一方であるが，ネクタイが八王子の織物産業を支えている。八王子織物工業組合への聞き取り調査では，現在でも日本のネクタイ

図５　八王子織物の着尺織物・洋装織物別生産割合の推移



（出所）東京都立繊維工業試験場（現：東京都立産業技術研究センター）『東京都の繊維工業』1966～1989各年度版，同『東京都の繊維産業：現状と課題』1990～1998各年度版

14）　八王子市郷土資料館（2020）『織物の八王子―戦後から現代までをたどる』42頁。

の100本のうち10本が日本産で，そのうち２本が八王子産である[15)]。日本の市場では日本製ネクタイの市場シェアが10％ある中で，八王子産がそれの20％を占めており，日本全体の２％を占めることになる。

ネクタイ，マフラーの後にはヒット製品がなく，八王子の織物産業は次第に衰退していく。しかし，生き残っているのである。

4　おわりに

本稿は，工業団地計画，産業クラスター，地域産業システムという３つの視座から，地域産業が産業専用の工業団地の開発を目指すことによって産業クラスターを形成できたから生き残ることができたという仮説を導き，産業専用の工業団地の構想実現を目指した八王子の織物産業のケースからその仮説の検証を試みた。

戦後，八王子の織物産業が復活し，各専門業者の集積により織物のバリューチェーンが構築され，八王子地域では織物産業のクラスターが再形成された。クラスターの再形成により，新製品が創出され，織物産業が発展した。地域産業の発展において，産業クラスター理論が有力であることが確認できた。

八王子繊維工業団地の場合，産業専用の工業団地を目指したことは評価できる。青写真は素晴らしいものであった。しかし，計画通りに実現できなかった。繊維団地が完成するまでに約８年間かかった。この間に織物産業を取り巻く環境が大きく変わり，産業専用の工業団地に移転する必要がなくなったのである。最新の織機を導入すれば騒音問題をクリアでき，市内でも生産できる。また，量産生産の部分をアウトソーシングで実現できる。産業専用の小型版のクラスターを作らなくても，産地全体は工業団地の機能を持っていた。織物生産工程におけるコアの部分は八王子地域に残っていたため，量産部分を地域外にアウトソーシングしても，八王子の織物産業は生き残ることができた。

八王子の場合，山梨県へのアウトソーシングが多く行われた。その結果，山梨県が八王子産地の「機織工程の工場」になり，八王子―山梨という広域的なクラスターが形成されることになった。

前述したように工業団地の造成それ自体は目的ではない。当時の八王子の織物産業全体の競争力を向上するための戦略である。織物の生産工程は複雑である。労働集約的な部分を産地外にアウトソーシングしても，コアの部分を八王子産地内に残っている。必要な工程が市内に集積しているから，試作品を作ることができる。長い歴史の中で貯蓄された技術力，強い職人意識を持つ人と各産業団体のネットワークがあったから，八王子は産地として生き残

15）　筆者の同組合への聞き取り調査による（2020年９月７日実施）。

ることができたのである。ポーターやサクセニアンで論じられるように産業集積はコミュニケーションや個人や団体のネットワークを通じた相互作用にも依存しているとの指摘と合致する。ネクタイやマフラーの例のように，産業団体と地域文化の融合によって新事業が創出された。この新事業が産地を支え，外部環境が変化していく中でも対応でき，生き残ることができたのである。

サクセニアンが論じたように地域産業システムが十分に活動できれば，衰退しかかった産業は蘇ることができる。戦後，八王子地域では織物産業クラスターを再形成できた。この産業クラスターの中にある企業や個人，組合などの諸団体によりネットワークが形成された。これが八王子の強みになり，産地として生き残ることができた。しかし，織物産業が衰退していく中で，これまで構築されたネットワークも弱くなり，織物産業が蘇ることができなかった。

本稿では３つの視点から八王子の織物産業が生き残った要因を分析した。シングルケースの分析なので，普遍性に欠けている。ほかの産地で同じような結果が出るかを確認する必要がある。八王子の織物業者は中小企業が多い。そのため単独で生き残っているとは考えられない。生き残っている企業を対象に個別の生き残り戦略と産業集積との関係を確認する必要もある。これらが次の研究課題である。

謝辞　本論文の作成に当たり，中央大学の先生方には温かいご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。また，聞き取り調査と資料提供にご協力をいただきました八王子織物工業組合および八王子繊維工業団地協同組合の関係者各位に心より感謝申し上げます。

参考文献

王玲玲（2020）「八王子市における工業団地の形成と発展」『経済学論纂』第60巻第３・４合併号，203-213頁

加藤秀雄（2016）「繊維産業都市桐生市の構造変化と今後の発展に向けての分析視角」『社会科学論集』第148号，81-111頁

岸田林太郎（1960）「八王子の機業の分布について」『多摩文化』第４号　多摩文化研究会

関満博（1985）『伝統的地場産業の研究―八王子機業の発展構造分析―』中央大学出版部

高城寛（1971）『郡内機業の生産構造とその変化』大阪経済大学中小企業経営研究所

立川和平・山田和利・沖田耕一・遠山恭治（2001）「八王子織物産業における産地の衰退化と機屋の機能変容」『学芸地理』第56号，25-35頁

西岡久雄（1976）『経済地理分析』大明堂

日本地域社会研究所（1975）『日本の郷土産業２』新人物往来社

畑中繁太郎編著（1984）『八王子織物ネクタイ史』八王子織物工業組合

羽田新・吉兼秀夫（1977）「首都圏都市における工業化の展開―八王子市の場合―」『明治学院論叢』第263号（社会学・社会福祉学研究49），147-173頁

八王子織物工業組合（2000）『八王子織物工業組合百年史』ふこく出版
八王子市郷土資料館（2020）『織物の八王子―戦後から現代までをたどる』八王子市教育委員会
八王子市市史編集委員会（2017）『新八王子市史』通史編６　近現代（下）八王子市
八王子繊維工業団地協同組合（1985）『造成の軌跡』八王子繊維工業団地協同組合
原田誠司（2009）「ポーター・クラスター論について―産業集積の競争力と政策の視点」『長岡大学研究論纂』第７号，21-42頁
百瀬恵夫（1978）「工業団地の経済的特性」『政経論叢』第47巻第１号，97-126頁
吉田敬一（1979）「戦後八王子織物産地の発展過程」『社会科学』第25号，367-398頁
Porter, Michael E.（2000）*Location, Competition, and Economic Development: Local Clusters in a Global Economy*, Economic Development Quarterly Vol. 14, No. 1, pp. 15-34
―――（2008）*On Competition Updated and Expanded Edition*, Watertown, Massachusetts, Harvard Business Review Press（竹内弘高監訳，DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳［新版］『競争戦略論Ⅱ』（2018）ダイヤモンド社）
Saxenian, Annalee（1994）*Regional advantage: culture and competition in Silicon Valley and Route 128*, Cambridge, MA, Harvard University Press（大前研一訳『現代の二都物語―なぜシリコンバレーは復活し，ボストン・ルート128は沈んだか』（1995）講談社）
Weber, A.（1909）Über den Standort der Industrien. Tübingen, J. C. B. Mohr.
〈資料〉
八王子織物工業組合への聞き取り調査（2020年９月７日）
八王子市ホームページ　https://www.city.hachioji.tokyo.jp/
八王子繊維工業団地協同組合への聞き取り調査（2020年10月２日と10月16日）
八王子ファッション協議会　https://hfc-net.org/